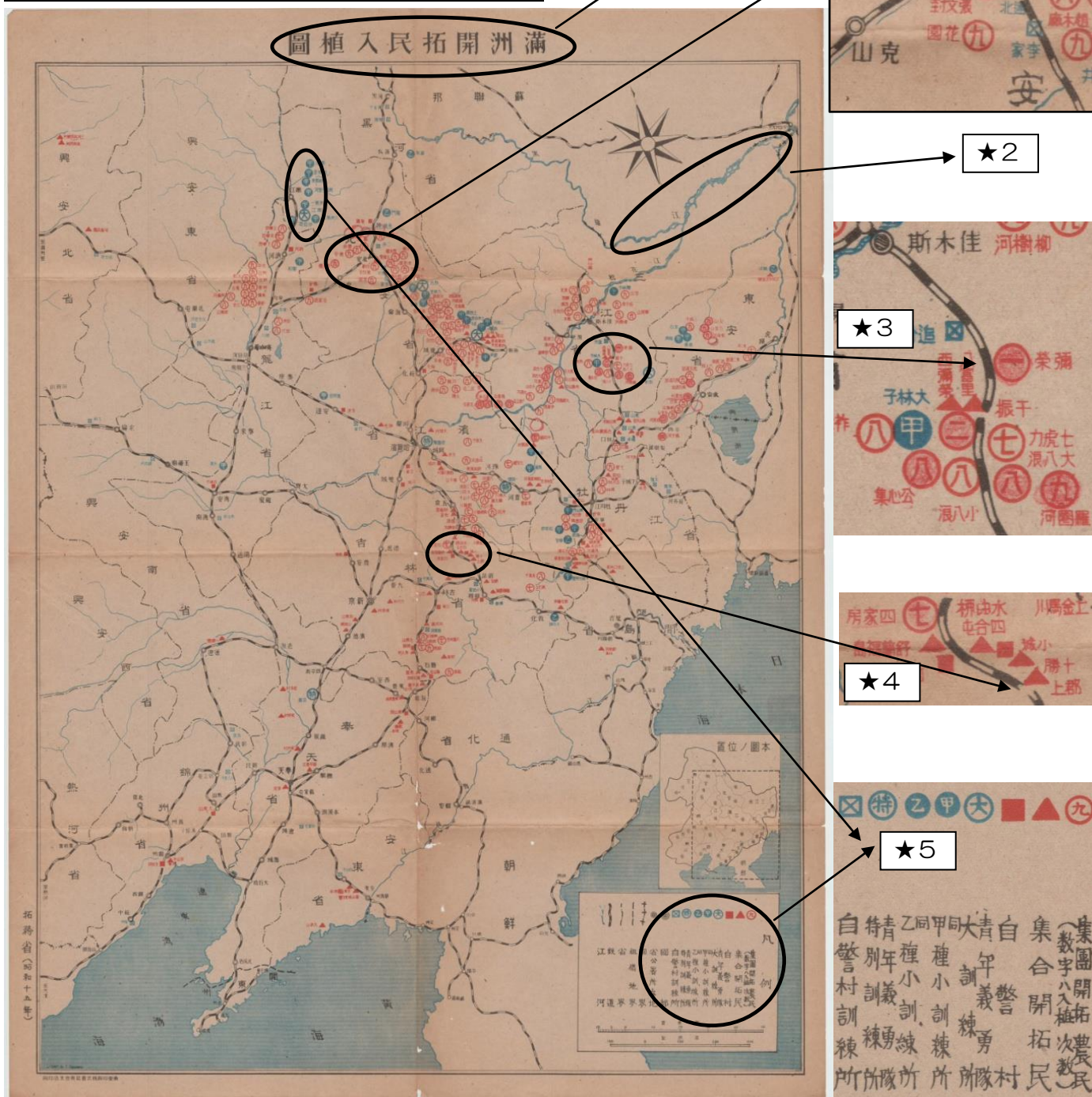


授業で使える当館所蔵地図

No.34 『満洲開拓民入植圖』
 作成年：1940（昭和 15）年
 サイズ：70×52cm
 作者：拓務省 東亜印刷株式会社東京支店



【本図の解説】 本図は、拓務省が作成したもので、満洲開拓団の位置と入植年次がわかる地図である。本図に示された赤丸の「一」から「九」の数字は、1933(昭和 8)年～1940(昭和 15)年までに入植した集団開拓団の入植次数を表している。他にも 1939(昭和 14)年からはじまる集合移民、1935(昭和 10)年からはじまる自警村、さらには各種訓練所の位置もわかる。当館には本図の他に 1938(昭和 13)年に拓務省拓務局が発行した『満洲農業移民入植圖』があり、1938(昭和 13)年の第 7 次集団移民までの開拓団の場所が表示されている。

★1 満洲開拓民とは

1932(昭和7)年に建国された満洲国に移住した人たちの事。満洲国を日本の強い影響下で維持したいと考えている関東軍と移民推進論者(加藤完治ら)は、満洲を安定支配し、対ソ連防衛を行うためには大量の農民の入植が必要であると考えていた。ただし大蔵大臣高橋是清は投資した分の見返りが期待できないとして大規模な予算化はされなかった。このため1932(昭和7)年~1936(昭和11)年の間は細々と試験移民が行われた。1936(昭和11)年に二・二六事件で高橋是清が死去すると広田弘毅内閣の下で予算化され、1937(昭和12)年~1941(昭和16)年の満洲農業移民一〇〇万戸移住計画第一期を迎える。1942(昭和17)年からは第二期に入ったが、国内の移民希望者数が伸び悩み、計画通りにはいかなかった。この地図では試験移民期と一〇〇万戸移住計画第一期の開拓団の数と配置を確認することができる。

★2 満洲とソ連との国境

満洲とソ連との国境は黒竜江(アムール川)である。1945(昭和20)年8月9日にソ連軍が国境を越えて侵攻してきたことで北部の開拓団の多くに略奪(時に暴行)など多大な被害が出た。

★3 試験移民期の開拓団

地図中の①弥栄 ③千振 は試験移民期の重要な開拓拠点である。試験移民期は匪賊(反日闘争を行う勢力を一般にそう呼んだ)による襲撃が頻発し、在郷軍人(軍役経験者)のみで結成された開拓団にも多くの犠牲が出た。特に1934(昭和9)年の土龍山事件の影響が大きく、退団者が相次ぎ、一時は移民事業の継続も危ぶまれた。なんとか匪賊を鎮圧したことで一〇〇万戸移住計画第一期では一般農民に門戸が開かれた。ただし、治安が安定しているのは鉄道沿線のみであったので、第5次、第6次あたりまでは鉄道に近い所にしか開拓団を配置できなかった。

★4 集合開拓団

地図中の赤い▲には郡上村開拓団がある。これには赤丸の数字がついていない。郡上村は1939(昭和14)年に入植したが、他の開拓団のように集団移民ではなく集合移民という形態を採用している。集合移民は30戸~200戸の小規模開拓団、集団移民は200戸~300戸と規模によって分類されていたため181戸の郡上村は集合扱いとなった。しかし、一〇〇万戸移住計画第一期に入っても200戸に満たないものがほとんどで、逆に181戸の郡上村は集合と名乗りつつ最大規模の開拓団となってしまった。

★5 青年義勇隊

地図中の青丸表示は青年義勇隊と呼ばれる武装開拓団である。一〇〇万戸移住計画第一期の頃から日本は日中戦争が始まり、軍需を中心に労働者が不足するようになっていた。このため、集団開拓団の欠員が増え、入植を促進したい関東軍は1938(昭和13)年から14歳から18歳までの少年を早期教育によって満洲の農民兼兵士として育成しようと考えた。国内の労働力不足が激しくなるにつれ青年義勇隊の募集は増え、中学教員による強引な勧誘も多く見られた。また、この青年義勇隊はソ連との国境近くに配置される事が多かったため、ソ連参戦時の被害も大きかった。満洲移民の目的が農村の経済更正ではなく、対ソ防衛による満洲支配であることが明らかになる事例である。

★6 北安省克山

この地図には表示されていないが、北安省克山には1944(昭和19)年に分村集団13次移民で郡上郡(現郡上市)から6団(総称して郡上郷と呼ぶ)が入植している。全国的に団員が集まらず開拓団が結成しにくい時期の入植であるため、郡上郡に何らかの送出圧力があつたと考えられる。記録を見ると、「満洲開拓第二次送出五力年計画の一環として郡上郡が開拓特別指導郡に指定せられ関係当局の指導と盛り上げる郡民の自覚とに依って・・・」と国もしくは県からの圧力をほのめかしている。後に紹介する郡上市遺族会『戦争体験の記録』内の野田かつ子「満洲開拓悲話」で紹介されているのは郡上郷の中の瑞穂開拓団である。

【活用の例】

○高校の日本史ABの授業において、満洲移民の目的や推移について地図を使って学ぶことができる。
 地図上の赤丸の数字を数えることで試験移民期と本格移民期の移民規模の違いを明らかにすることができる。

	次数	入植年	地図上の 開拓回数	入植者数 (全国)	岐阜県民を含む 開拓団名
試験 移民期	第1次	1932 (昭和7)年	1 団	1557 人	いよきから 弥栄村
	第2次	1933 (昭和8)年	1 団	1715 人	該当なし
	第3次	1934 (昭和9)年	1 団	945 人	みづほから 瑞穂村
	第4次	1936 (昭和11)年	2 団	7707 人	じまうしが 城子河
一〇〇万戸 移住計画 第一期	第5次	1937 (昭和12)年	4 団	7788 人	ちやうやうせん 朝陽村
	第6次	1938 (昭和13)年	17 団	30196 人	東海村
	第7次	1938 (昭和13)年	19 団		ちやうやうせん 朝陽川
	第8次	1939 (昭和14)年	38 団	40423 人	かほう 華陽 公心集読書
	第9次	1940 (昭和15)年	58 団	50889 人	とくめい しちせいさかしたから ほうおう ほれんがくたみ 徳命 七星坂下村 鳳凰 馬蓮河久田見
	第10次	1941 (昭和16)年	地図なし	35774 人	けいぞうがやまがたてら ちゅうもうせん 鶏走河山泉郷 柳毛溝恵那郷
第二期	第11次	1942 (昭和17)年	地図なし	27149 人	該当なし
	第12次	1943 (昭和18)年	地図なし	25129 人	ぶぎ郷 武儀郷
	第13次	1944 (昭和19)年	地図なし	23650 人	つばき みるほ ほすま こうわ にしわら ひがしから 積翠 瑞穂 秀真 興和 西和良 東村
	なし	1945 (昭和20)年	地図なし	13545 人	

*開拓民入植者数(全国)は参考数値

移民次数の数字が大きくなるにつれソ連国境に近づく傾向があること、青丸の義勇隊関係施設の場所はさらにソ連国境に近いことから、移民事業の目的が農村更正よりも満洲支配と対ソ防衛に重きを置いていた事が読み取れる。満洲移民に否定的であった高橋是清が1936(昭和11)年の二・二六事件で暗殺されたことにより、満洲移民政策の壁がなくなり、さらに農村の惨状に注目が集まり、満洲移民の農村経済更正という性格を強調することができた。二・二六事件が実際の政策に与えたわかりやすい例として取り上げることができる。

○中学校や小学校の社会科の授業において、郷土出身者の開拓村を抽出し、開拓団の概要を知ることができる。
 例 岐阜県開拓自興会『岐阜県満洲開拓史』には県内送出の全開拓団の入植から引揚げまでの概要と、団員名簿(生死まで記録)があるため、最寄りの市町村ゆかりの開拓団について知ることができる。ただし、第11次以降の開拓団は地図上にないため『岐阜県満洲開拓史』付属の地図を参考にする必要がある。

○体験談などの文献との組み合わせでさらにそれぞれの開拓団の詳細、死亡率など詳細に学習することができる。
 例 郡上市遺族会『戦争体験の記録』には野田かつ子さんの「満洲開拓悲話」が掲載されており、地図と団員名簿を傍らに読む事で、入植から逃避行の経路、誰がどこで亡くなったのかについておおまかに把握することができる。
 引揚げルート 克山→哈爾濱(ハルビン)→新京→奉天→葫蘆島(コロ島)→佐世保

基本文献 岐阜県開拓自興会『岐阜県満洲開拓史』

参考資料(基礎知識) 小林英夫『〈満洲〉の歴史』
 二松啓紀『移民たちの「満洲」』
 陳野守正『先生、忘れないで！「満蒙開拓青少年義勇軍」の子どもたち』

参考資料(授業用) 森田拳次『遙かなる紅い夕陽 満洲からの引き揚げ』
 郡上市遺族会『戦争体験の記録』
 満蒙開拓平和記念館『満蒙開拓平和記念館』

授業をするにあたって参考になる場所 満蒙開拓平和記念館(長野県下伊那郡阿智村駒場)
 郡上市たかす開拓記念館(岐阜県郡上市高鷲町大鷲)

*ここでは「満洲」の「洲」の字を書名以外「州」で統一して表示しています。